

(6) 自閉症児に対する構造化を用いたコミュニケーション支援  
 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 修士課程 ○大岡 和子  
 川崎医療福祉大学大学 医療福祉学科 寺尾 孝士  
 川崎医療福祉大学大学 医療福祉学科 重松 孝治

## 【要旨】

### 1. 背景

自閉症はDSM-IVとICD-10において、脳の広汎な領域にわたり機能障害をもつ発達障害としてとらえられており、その中核的な障害のひとつにコミュニケーションの質的な障害をもつ。こうした自閉症児に対して、日常生活で実際に役立つ意思伝達の能力を改善するものとして、TEACCHプログラムのコミュニケーションカリキュラムがある。コミュニケーションカリキュラムは、自閉症児が現在持っている自発的なコミュニケーションスキルを重要視し、個別の評価から作成される。

### 2. 目的

本事例研究では、TEACCHのコミュニケーションカリキュラムを適用し、自閉症児の個別評価に基づいて構造化された指導により、協力児の適切なコミュニケーションスキルの習得を図ることを目的とした。

### 3. 倫理的配慮

本事例研究は、川崎医療福祉大学倫理審査会の承

認を得ている。

### 4. 対象および方法

自閉症と診断された特別支援学級に在籍する小学1年生男児1名（以下A児）を対象に指導を行った。PEP-3検査によるアセスメントとコミュニケーションサンプルの分析、コミュニケーションサマリーの評価から、長期目標を「適切な要求表現をする」とした。要求のスキルを様々な文脈で学習するために、第1期から4期までの短期目標を設定し、構造化された指導を行った。

### 5. 結果および考察

13回の指導を実施し、初回の支援者によるプロンプトによる介入以後、1期から4期において100%の達成率でA児の要求表現が表出された。その要因として①学習のプロセスにおいて、場所や物の変化を一つのみにして新しいスキルの習得を図ったこと②視覚的な情報としての「手がかりカード」の使用③構造化を用いた指導、という3点が有効であったと考えられた。